

高等学校教育課程研究集会 参考資料

平成16年8月 岐阜県教育委員会

国 語

1 国語科の目標とねらい

Q 新学習指導要領では国語の目標はどのように示されているか。

国語科の目標は次のとおりである。

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

従前の目標と比較すると、「理解」と「表現」の順序が入れ替わり、表現力の育成を重視する姿勢がうかがえる。また、新しく「伝え合う力を高める」が加わり、言語による相互伝達や相互理解の能力を高めることが求められている。

「伝え合う力」とは、互いの立場や考えを尊重しながら言語を通して適切に表現したり理解したりする力のことであり、急速に変化していくこれからの社会の中で、異なる考えや立場にある人々の間で理解し合い伝え合うことができるよう、是非とも身につけさせなければならない力である。

また、平成10年7月に示された教育課程審議会の答申では、自ら学び自ら考えるなどの「生きる力」を育成するという改訂の趣旨を踏まえ、おおむね次の点が改善の基本方針として示されている。

- ・言語の教育としての立場を一層重視する。
- ・互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することに重点を置く。
- ・自分の考えをもち論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てることを重視する。
- ・領域構成を「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」及び言語事項の3領域1事項とする。
- ・指導の充実を図る観点から、言語活動例を示す。
- ・各領域の指導時間数の目安を示す。

つまり、国語科の学習指導は、言葉による表現や理解の基本的な能力を身に付けさせ、その上にたって言葉で伝え合う力を高めること、そして、自ら学び、自ら調べ、考え、話し合い、問題を解決していく能力を育てていくことを目指しているのである。

2 国語科における改善の内容

Q 高等学校国語科における改善の要点は何か。

今回の改訂で重要なのは、ややもすれば知識中心・教師主導型の指導に偏りがちであった高等学校国語科の授業から、生徒が主体的に言語活動を行い言語能力を伸ばす学習を展開する授業へと指導を改善するところにある。

そこで、科目構成として、適切に表現する能力、伝え合う力を高めるために国語表現に関する2つの科目を設け、「国語表現Ⅰ」は選択必修科目とした。

また、実践的な指導の充実を図ることを目的に、各科目ごとに具体的な言語活動例が示された。内容を大別すると次のような言語活動である。

- ・課題に応じて必要な情報を収集し、その成果を基に報告や発表などを行う言語活動
- ・文章の理解を深め考えを広めるために、関連ある文章を読んだり読み比べる言語活動
- ・題材を選んで考えをまとめ、発表、討論したり意見を書いたりする言語活動
- ・文章を読んで感じたことや考えたことを文章にまとめたり話し合ったりする言語活動
- ・相手や目的に応じて話をしたり文章を書いたりする言語活動
- ・表現上の特色や効果について考えたり話し合ったりする言語活動
- ・古文や漢文の調子などを味わいながら音読、朗読、暗唱する言語活動

言語活動例には、情報の読みとりや文章の読み比べなど、問題解決学習に役立つような生徒の主体的な読みの学習が示されている。この内容を踏まえると、国語科においては、表現能力の育成を重視するとともに、読むことの指導内容の改善を図ることが重要視されなければならない。

つまり、書き手の立場に立って的確に読み取る能力を養い、その確かな読みの力を基盤として、読み取った内容について自分の考えをもち、話し合ったり意見を書いたりする言語活動学習の指導が期待されているのである。

3 授業改善の方向

Q 高等学校国語科における授業改善の方向はどのようなものか。

国語科における改善の内容は、次のような方

向に授業改善を図る必要を示している。

① 生徒の主体的な言語活動が行われる授業を展開する。

生徒が課題意識をもって「話す・聞く」、「書く」、「読む」活動を行うことで、生徒一人一人の言語能力が高まる授業を展開する。

そのためには、教師が解説して進める授業やいわゆる一問一答式の発問による授業展開など、生徒の主体的な言語活動が行われない授業になっていないか、日々の授業を再点検する必要がある。また、「読むこと」の学習指導においては、本文の内容理解を中心とするいわゆる内容中心主義になりがちなので、その授業でどのような言語活動の力を身につけさせるのかを明確にした授業計画を立てなければならない。

② 言語の教育の観点から指導目標及び学習目標を設定する。

言語の教育の観点から指導目標を設定し、授業の中でどのような言語能力を身に付けさせるのかを明確にするとともに、生徒にはどのような言語能力を身に付けるための学習であるのかを具体的に意識化させた上で授業を展開する。

国語科の授業では、従前から言語の教育が行われてきたところであり、1時間の授業の中で生徒は「話す・聞く」、「書く」、「読む」活動を行ってきたはずである。しかし、指導の対象とする言語活動を絞り込まず、生徒のすべての言語活動を総花的にとらえ指導を焦点化しないために、生徒に確かな言語能力が身に付かないで終わってしまうおそれもあった。その点で言語の教育という観点から目標を設定することの重要性を認識する必要があるのである。

③ 評価規準、評価方法、評価場面を明確に設定する。

目標に照らして、学習者の実現状況を適切に評価し、指導に生かしていくための評価の在り方について研究する。

また、教師による評価とは別に、学習活動として生徒に自己評価や相互評価をさせることで、課題意識をもって主体的に学習に取り組ませる態度を養うことができる。

4 指導と評価について

Q 目標に準拠した評価を行う意義は何か。

学習指導における評価について、平成 12 年 12 月の教育課程審議会答申に次のように示されている。

学習の評価は、教育がその目標に照らしてどのように行われ、児童生徒がその目標の実現に向けてどのように変容しているかを明らかにし、また、どのような点でつまずき、それを改善するためにどのように支援していけばよいかを明らかにしようとする、いわば教育改善の方法とも言うべきもの

この内容はこれまでの評価の位置づけと大きく変わるものではないが、今回の改訂であらためて強調されているのは、次の理由による。

- ① 教育課程改訂の方針の 1 つに「基礎・基本の確実な定着」があるが、それを実現させるために目標を明確に設定し、それに照らして生徒の実現状況を評価し、その評価に基づいて指導を充実させていくことが求められている。
- ② 学校が、家庭や地域社会から信頼されるとともに相互の信頼関係を築くために評価に関する説明責任を果たすことが重要である。

高等学校においては、従来から実施してきた目標に準拠した評価を充実させ、生徒の基礎的・基本的な学力を確実に身に付けさせ、「生きる力」を育むものとしていかなければならない。

Q 適切な評価はどのような手順で行えばよいか。

ア 教科・科目の目標と観点別評価の設定

各学校において、自校の学力の実態を把握し、学習指導要領に示された教科・科目の目標及び内容と、各学校で設定されている教育目標を踏まえて目標を設定する。

そして、その目標の実現状況を評価するために目標に準拠した評価を行う。目標は多面的な側面をもち、どの側面からとらえるかによって評価は異なったものになるので、評価の観点を明確にして具体的な評価活動に入る必要がある。国語科の評価の観点は、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の 3 領域の能力と「関心・意欲・態度」、「知識・理解」の 5 つの観点で構成する。

<評価の観点と趣旨>

観点	趣 旨
関心 意欲 態度	国語や言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図り、進んで表現したり理解したりするとともに、伝え合おうとする。
話す 聞く 能力	自分の考えをまとめたり深めたりして、目的や場面に応じ、筋道を立てて話したり的確に聞き取ったりする。
書く 能力	自分の考えをまとめたり深めたりして、相手や目的に応じ、筋道を立てて適切に文章に書く。
読む 能力	自分の考えを深めたり発展させたりしながら、目的に応じて様々な文章を的確に読み取ったり読書に親しんだりする。
知識 理解	表現と理解に役立てるための音声、文法、表記、語句、語彙、漢字等を理解し、知識を身に付ける。

イ 指導と評価の年間計画の作成

- ・1つの単元で指導の対象とする領域は1領域に絞り、1年間を見通して単元構成に沿った指導領域の効果的な配分を行う。
- ・「国語総合」は、「話すこと・聞くこと」と「書くこと」の配当時間数の目安が示され、「話すこと・聞くこと」を主とする指導には15単位時間程度、「書くこと」を主とする指導には30単位時間程度を配当するものとしているので、それに基づいて計画を作成することにも留意しなければならない。

ウ 単元における目標と評価規準の設定

- ・各単元においては、1単元1領域の指導を基本とする。他の領域とも関連させた学習を展開することは大切であるが、指導の対象とする領域は1つに絞る。
- ・教科・科目の目標を踏まえて、単元の目標を設定する。単元の目標は、「指導の対象とする領域の力」と「関心・意欲・態度」と「知識・理解」の3観点について設定する。
- ・目標に即して、その実現状況を客観的に判断するための拠り所として評価規準を設定する。評価規準が示す学習状況は、目標に照らして「おおむね満足できると判断される」状況であり、具体的な生徒の姿として設定することが肝要である。

エ 各時間の指導と評価

- ・各時間における評価は、生徒一人1人について、評価規準に基づいて行う。評価規準が示す状況を実現していれば「おおむね満足できると判断される」状況（B）であり、実現していなければ、「努力を要すると判断される」状況（C）であると評価する。
- ・さらに、「おおむね満足できると判断される」状況（B）について、質的な高まりや深まりをもっていると判断されるとき、「十分満足できると判断される」状況（A）という評価

になる。

- ・今回の教育課程改訂の方針である「基礎・基本の確実な定着を図る」ことを踏まえると、評価は、行ったらそれで終わりというものであってはならない。特に「努力を要すると判断される」状況（C）と評価した生徒に対する手だてが具体的に講じられなければならない。そのためには、「努力を要すると判断される」具体的な状況を予め想定し、授業の中で適切な助言が行えるよう準備しておく必要がある。
- ・各時間における評価は、学習目標に照らして、3つの観点（「指導の対象とする1つの領域の力」と「関心・意欲・態度」と「知識・理解」）のうち対象となる観点から行う。
- ・各時間の学習指導を行うときには、目標の実現状況を効果的に評価するための評価方法を検討し、各時間の学習指導の中で効果的に評価できる場面を具体的に設定しておかなければならない。
- ・観点別に実施した評価は、単元ごとに総括しておくことが望ましい。

オ 評価から評定への総括方法の確立

- ・単元ごとに実施した評価を評定に総括する方法を確立しておかなければならない。
- ・従前の「知識・理解」に偏りがちであった評価から観点別の評価へと転換した以上、定期考査や小テストを中心とした評定ではなく、評価規準に基づいて授業で実施した評価を評定に総括する方法を定める必要がある。
- ・評価内容と評価方法については、生徒や保護者に明示できる状態を確立しておかなければならない。

Q 指導と評価の一体化とはどのような考え方か。

「指導と評価の一体化」について、平成 12 年 12 月に示された教育課程審議会答申には

指導と評価とは別物ではなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要である。

と述べられている。これは、目標に準拠した評価により基礎・基本の確実な定着を意図した指導においては、重要な点である。

生徒を数量的に評価したり相対的に評価するのは違い、生徒一人一人に基礎・基本を確実に身につけさせることができたかどうかを見とどけることが大切であり、評価により基礎・基本の定着度を測り、その結果に応じて授業の中で指導内容や方法を変更し、生徒一人一人に対して指導・助言を行ったり、次時以降の学習指導の在り方を検討することが求められるのである。

<単元ごとの指導と評価の計画例 現代文>

○単元の指導計画

単元名	詩を読む		
単元の目標	・人物の心情を想像力を働かせながら読もうとする態度を身に付ける。(関心・意欲・態度) ・『永訣の朝』について、人物、情景、心情などを的確にとらえ、表現を味わう。(読むこと) ・語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、文体や修辞などの表現上の特色をとらえる。(知識・理解)		
評価規準の例	<関心・意欲・態度> ・「わたくし」や「いもうと」の心情や情景を想像力を働かせながら読み深めようとしている。	<読む能力> ・『永訣の朝』を読んで、「わたくし」の心情の推移や「いもうと」との関係、舞台となる情景と「わたくし」の心情との関わりを的確にとらえている。	<知識・理解> ・方言やローマ字表記などといった表現上の特色について理解している。

○時間ごとの指導と評価の計画

	主な学習内容	主な学習活動 【評価の観点】	評価の方法・指導
第1時間目	○詩の内容を大まかにつかむ。 ○詩に描かれた情景を理解する。 ○「わたくし」の行動と心情を理解する。	・詩の情景や「わたくし」の心情に対する自分の感想を持つ。【関】 ・詩に描かれた情景と「いもうと」の様子を的確に読みとり、「わたくし」の心情との関わりを理解する。【読】 ・「いもうと」が頼んだ「あめゆき」を取りに行く「わたくし」の心情を読み取る。【読】 ・抽象的な語句の意味を明らかにし、内容の理解を深める。【知】	観察 机間指導 (発表、学習プリント①への記述)
第2時間目	○「わたくし」の「いもうと」に対する心情を理解する。 ○「わたくし」の心情の推移を理解する。	・「いもうと」に対する「わたくし」の心情その推移を、情景も関連させながら読み取る。【読】 ・詩の中で使われている方言やローマ字表記の効果について理解する。【知】 ・グループで話し合い、他の生徒の読みと比較することで自分の読みを深める。【関】	観察 机間指導 (発表、話し合い、学習プリント①、②への記述)
第3時間目	○「わたくし」の悲しみが祈りへと昇華していく過程を理解する。 ○この詩に表れた「わたくし」の生き方を理解する。	・悲しみの中で「わたくし」の思いがどのように変化していったかを読み取る。【読】 ・授業を通して自分の感想がどのように変容したかを確認する。【関】	観察 机間指導 提出物の点検 (発表、学習プリント①、②への記述)

<準備する学習プリント>

- ① 本文作業プリント(上段に本文を配し、下段に生徒が読み取ったことを書き込めるようにしてあるもの)
- ② 自己評価プリント(初読の感想、グループ討議、読後の感想、読み深まりの自己評価)

○学習指導案例

科 目	現代文		
本時の位置	第2時間目（全3時間）		
本時の目 標	ア 「いもうと」に対する「わたくし」の心情とその推移を、情景も関連させながら読み取る。【読】 イ 詩の中で使われている方言やローマ字表記の効果について理解する。【知】 ウ グループで話し合い、他の生徒の読みと比較することで自分の読みを深める。【関】		
	学 習 内 容	学 習 活 動	指導上の留意点・観点別評価
導 入	・前時学習内容の確認 ・本時の目標の確認 ・本文音読	・前時の学習の確認をする。 ・本時の学習目標を確認する。 ・課題をもって本文を音読する。	・本時は、人物の心情を読み取る力を身に付ける学習を行うことを確認させる。 ・課題①を示し、それについて考えながら読むよう助言する。
展 開	< 読み取る内容 1 > 「いもうと」のこぼれにより「わたくし」の暗く沈んだ心が強い決意へ変わっていく心の動きを読み取る。		
	〔課題①（中心となる発問）〕 ・「わたくし」が「いもうと」に「ありがとう」と感謝したのはなぜか。 ・「わたくし」の心情はどのような変化しているか。 - それぞれ、どのような表現からそれがわかるか。	<一人読み> ・ひとり読みを行い、学習プリント①に課題に対して読み取るべき本文の箇所を傍線を引き、下段にそこから読みとれることを書き込む。 ・読みとった内容を発表する。他の生徒の発表を聞き、自分の読みと比較し読み深める。	目標アに対する評価規準と評価方法 <評価規準>「わたくし」の心に変化が起こったわけと心情の変化を「いもうと」のこぼれや「あめゆき」の表現の変化から読み取っている。 <評価方法>記述、発言の観察 <状況「C」の生徒への手だて> ・「いもうと」が「あめゆき」を頼んだわけを考えるよう助言する。 ・「あめゆき」を表すことばがどのように変わっているかに注目させる。
開	< 読み取る内容 2 > かけがえのない存在である「いもうと」を失う「わたくし」の深い悲しみを読み取る。		
	〔課題②中心となる発問〕 ・「いもうと」は自分にとってどのような存在であると「わたくし」は思っているか。 ・「Ora…」や「わかれてしまう」の表現から、「わたくし」が「いもうと」のこぼれをどのように受け止め、どう思っていることがわかるか。	<グループでの話し合い> ・グループ別に課題②について話し合い、他の生徒の読みと比較しながら自分の読みを深める。 ・グループごとにそれぞれの課題に対する読みとりを発表する。 ・（読み深めが足りない部分があれば、発問に対する読みとりの確認）	本文のこぼれを手がかりに話し合いを進めるよう助言する。 目標ア・イに対する評価規準と評価方法 <評価規準>「わたくし」の「いもうと」への心情を他の表現と関連づけたり読み比べたりして読み取っている。 <評価方法>話し合い、発表の観察 <状況「C」の生徒への手だて> ・「いもうと」との関係がわかる表現を抜き出すよう助言する。 ・「陶枕」から二人のどのような様子がわかるか考えるよう助言する。 ・「おら おらで…」という平仮名表記と読み比べるよう助言する。 ・「わかれてしまう」を「死んでしまう」「行ってしまう」と読み比べるよう助言する。
ま と め	・自分の読みとりの自己評価 ・次時の学習の確認	・話し合いにより自分の考えがどのように変化したかを学習プリント②に書き込む。 ・次時に学習する内容を確認する。	目標ウに対する評価規準と評価方法 <評価規準>話し合いに積極的に参加し自分の読みを深めようとしている。 <評価方法>記述、提出物の観察 <状況「C」の生徒への手だて> ・ひとり読みの作業と話し合いの様子を評価しプリントにコメントする。